

Lampiran 3 Cerita rakyat Jepang

1. Kintaro (金太郎)

あしがらさん きんたろう ほはうえ す ちちうえ  
むかし、むかし足柄山に金太郎という男の子と母上が住んでいました。父上  
きょう みやこ ぶ し てき と ころ  
は京の都の武士で敵に捕らえられ殺されてしまいました。

てき のが つ やまおく はい  
母上は、敵から逃れ、小さな金太郎を連れて山奥に入りました。

おつと いちにんまえ ぶ し  
「この子を夫のような一人前の武士にしなければなりません。」

おやこ どうくつ く き の  
親子は洞窟の中にかくれ暮らしています。木の実や野イチゴなどを取ってき  
ては金太郎にあた えていました。かつてはとても美 しかった すがた も今は色あせ  
てしまいました。きもの きたな す き ひっし  
着物も汚くなり、擦り切れていました。しかし必死に金太  
郎をそだ 育てました。

げんき もり す どうぶつ あそ すもう  
金太郎は元気のいい男の子になりました。森に住む動物と遊んだり、相撲を  
したりして毎日 す すごしていました。

つぎ きみ ばん  
「くまさん、次は君の番だ。さあ、かかってこい。」

くま すもう もり しか  
熊も金太郎にはかないません。相撲のあとは森の中でかけっこです。鹿と  
きょうそう き のぼ さる おそ おお こい ともだち こい  
競争です。木登りは猿から教わりました。川では大きな鯉が友達です。鯉  
きゅうりゅうくだ  
にまたがると急流下りです。

どうくつ  
雨の日は、洞窟の中で、ねずみやりすやキツネやたぬきやさるやうさぎやく  
またちとおしゃべりです。金太郎は森の にんきもの 人気者です。

かみ いの  
金太郎を見ながら、母上は神に祈りました。

すば ぶ し  
「どうか素晴らしい武士になりますように。」

すうねん す はる き ひ どうぶつ とな たんけん  
数年が過ぎ、春が来ました。ある日、金太郎は動物たちと隣の山に探検に  
出かけました。大きな熊の背中(くま)にまたがり、おのを肩(かた)に背負い、その後をね

## Lampiran 3 Cerita rakyat Jepang

ずみやリスや猿やうさぎやキツネやタヌキやいのししや鹿がついていきます。

みんな幸せでした。

がけに来ると下を激流が流れています。

「流れが速くて川は渡れない。」と金太郎。

「あの大きな木を倒して橋を作りましょう。」と熊は木を押しましたがびく

ともしません。押しても葉っぱが揺れるだけです。

「よし、私がやってみよう。」と金太郎は大きな木の前に立ち、力一杯押し

始めました。するとどうでしょう、木が傾き、大きな音とともに倒れ川の

上にかかりました。みんな大喜びです。すると後ろから声がしました。

「ものすごい力だ。」

そこには立派な武士とその家来が立っていました。

「私は源頼光と申すものです。私の家来になりませんか。」

「私は武士になれるのですか。」

「あなたならきっと素晴らしい武士になれるでしょう。」

金太郎は母上のところに帰るとこの話をしました。

「私は父上のような立派な武士になりとうございます。」

別れるのはつらいけれども母上の目からは喜びの涙が流れました。

山を去るとき、母上だけでなく動物たちも金太郎をさびしい??"

そうに見送りました。

Lampiran 3 Cerita rakyat Jepang

「母上<sup>おん</sup>ありがとう<sup>けつ</sup>ございました。ご恩<sup>わす</sup>は決して忘れ<sup>む</sup>ません。かならずお向かい<sup>まい</sup>に参<sup>なんど</sup>ります。」金太郎<sup>ふ</sup>は何度も何度も手<sup>て</sup>を振<sup>ふ</sup>りました。

数年<sup>す</sup>が過<sup>さかた</sup>ぎ、金太郎<sup>きんたろう</sup>は坂田金時<sup>さかたきんとき</sup>という武士<sup>ぶし</sup>になりました。ご主人<sup>しゅじん</sup>の忠実<sup>ちゅうじつ</sup>な四人<sup>よんにん</sup>の家来<sup>けらい</sup>に選<sup>えら</sup>ばれ、大江山<sup>おおえやま</sup>に住<sup>す</sup>む鬼<sup>おに</sup>も退治<sup>たいじ</sup>しました。

その後<sup>きょうご</sup>、京<sup>みやこ</sup>に母上<sup>おん</sup>を迎<sup>むか</sup>え幸<sup>しら</sup>せに暮<sup>く</sup>らしました。(2002.2.24)

2. Jihi no Kami Sama (慈悲の神様)

むかし、むかし、あるところに心優<sup>こころやさ</sup>しい女<sup>おんな</sup>の子<sup>こ</sup>が住<sup>す</sup>んでいました。両親<sup>りょうしん</sup>をなくし、村人<sup>むらびと</sup>に助<sup>たす</sup>けられ一人<sup>ひとり</sup>で暮<sup>く</sup>らしておりました。

ある日<sup>ひ</sup>のことです。道<sup>みち</sup>のわきにお坊<sup>ぼう</sup>さんが横<sup>よこ</sup>たわっておりました。

「お坊<sup>ぼう</sup>さん、どうしたのですか。」と<sup>い</sup>うと、お坊<sup>ぼう</sup>さんの額<sup>がく</sup>に触<sup>さわ</sup>ってみました。

「まあ、大<sup>たい</sup>変<sup>へん</sup>。熱<sup>ねつ</sup>があるわ。」

女<sup>むすめ</sup>の子<sup>こ</sup>は、お坊<sup>ぼう</sup>さんの手<sup>て</sup>を取<sup>と</sup>ると、小<sup>ちひ</sup>さな家<sup>か</sup>までつれて行き床<sup>ゆか</sup>につかせてやりました。おかゆ<sup>かゆ</sup>を食<sup>く</sup>べさせたいと思<sup>おも</sup>いましたが、お米<sup>こめ</sup>がありません。

女<sup>むすめ</sup>の子<sup>こ</sup>は隣<sup>となり</sup>の家<sup>いえ</sup>からお米<sup>こめ</sup>を少<sup>すこ</sup>し分<sup>わ</sup>けてもらうことにしました。

「すみません。お米<sup>こめ</sup>を少<sup>すこ</sup>し分<sup>わ</sup>けてください。」

「いいよ、田<sup>たう</sup>植<sup>てつだ</sup>えのとき手<sup>て</sup>伝<sup>でん</sup>ってね。」

「わかつたわ。あ<sup>あ</sup>りが<sup>あ</sup>とう。」

女<sup>むすめ</sup>の子<sup>こ</sup>は近<sup>きんじよ</sup>所<sup>じよ</sup>の家<sup>いえ</sup>にも行<sup>い</sup>きました。

「すみません。お薬<sup>くすり</sup>を少<sup>すこ</sup>し分<sup>わ</sup>けてください。」

## Lampiran 3 Cerita rakyat Jepang

「いいよ、田植えのとき手伝ってね。」

「わかったわ。ありがとう。」

女の子は近所の家々を回って味噌や豆腐や魚や野菜や牛乳を分けてもらいました。

「すみません。・・・を少し分けてください。」

「いいよ、田植えのとき手伝ってね。」

「わかったわ。ありがとう。」

結局、二十件の家を回って、三日三晩お坊さんの看病をしました。

お坊さんは元気になって旅立つとき、女の子に小さな仏像をあげました。

「手厚い看病ありがとう。元気になりました。お礼のしるしとしてこの観音様をあげましょう。」

数週間後、隣の人がやってきました。

「明日が田植えだ。頼むよ。」

次から次へと近所の人がやってきました。

「明日が田植えだ。頼むよ。」

結局、二十人の村人がやってきました。

「どうしよう。一日で一度に二十人の田植えは手伝えないわ。観音様、助けてください。」

観音様の前に座って一生懸命祈りました。

## Lampiran 3 Cerita rakyat Jepang

ところで、あのお坊さんも山の上でお祈りしていました。すると突然空が暗くなり、美しい観音様が空に現れました。

「お坊さん、よく聞きなさい。あなたがお世話になった女の子がとても困っていますよ。助けてやりなさい。十九人の娘さんを連れて村に行きなさい。」と言うと、消えてしまいました。

お坊さんは、ある村の家々を訪れて、娘さんをお願いしました。

「娘さん、山の向こうの村の田植えを手伝ってくれないかい。」

「お坊さんのお願いなら手伝うわ。」

結局、十九件の家を回って、娘さんをお願いしました。

田植えの前の晩、女の子は観音様の像の前に座って考えていました。

「全部の家の手伝いはできないわ。明日は隣の家を手伝いましょう。

一生懸命働けば、観音様が助けてくれるわ。きっと何とかなるわ。」

外では雨が降り出しました。

次の日、まだ夜が明けぬ暗い朝、女の子は起きると箕（みの）と箕かさを身にまとい出かけました。

お坊さんと箕（みの）と箕かさをまとった十九人の娘さんも村に着きました。

それぞれの家に行き、田植えを手伝ってやりました。

「お手伝いありがとう。」村人たちは言いました。

女の子と十九人の娘さんたちはそれぞれの田んぼで一生懸命働きました。一方、お坊さんは女の子の家で観音様にお祈りしていました。

### Lampiran 3 Cerita rakyat Jepang

夕方、女の子はへとへとになって帰ってきました。そして、十九人の娘さんとお坊さんは戻っていきました。

次の朝、近所の十九人の村人が女の子の所にやってきました。

「ごめんさない、でも・・・」と言おうとしました。

「昨日はお手伝いありがとう。」

村人たちはお礼に色々なものを持ってきてくれました。女の子は昨日何が起ったのかわかりませんでした。でも小さな観音様を見て、

「あ、わかった。観音様が私の代わりに田植えを手伝ってくれたのだわ。」

女の子は、観音様の前にひざまずくと、心を込めて祈りました。

隣の方がやってきました。

「昨日はお手伝いありがとう。ところで、お願いがあるのだが？」

「なに。」

「結婚してくれないか。」

女の子は微笑みました。観音様もそうでした。(Kudo)

### 3. Hekoki Onna (屁こき女)

むかし、むかし、ある所に心やさしい娘さんが住んでいました。しかし、ただ一つ難点がありました。娘さんは、人前でもおならを我慢することが出来ませんでした。娘さんは、結婚の望みもあきらめていました。

しかし、ある日のことです。娘さんに人目ぼれした長者の息子さんが結婚を申し込み娘さんの家に来ました。

## Lampiran 3 Cerita rakyat Jepang

娘さんの両親はわれを忘れて喜び、申し込みを受け入れました。  
 母親は、婚礼の前日、たいそう心配して、娘さんに言いました。  
 「よく聞きなさい。夫の前であろうと、人前であろうと、絶対おならをし  
 てはなりませんよ。どんなことが起きても、おならを我慢しなければいけま  
 せんよ。家から追い出されてしまいますよ。いいですね。」

娘さんは、心やさしく働き者でしたので、夫からも夫の両親からもたい  
 そう大事にされました。数日は、何とかおならをするのを我慢できましたが、  
 どうとう五日目、ご飯を食べている時、大きなおならをしてしまいました。  
 「何てことを。」と姑が言いました。

娘さんは、とても恥ずかしくて家を飛び出しました。  
 「お母さんから、おならをしてはならない、と言われていたのに。もう家には  
 帰れない。」

娘さんは、あちこちを歩き回ったあげく、山の滝のところにやってきまし  
 た。座り込んでしばらく泣き続けました。そして、ついには滝に身を投じて  
 命を落としてしまいました。

妻の死を聞いた夫も、妻が身を投げた滝の所にやってきました。  
 「かわいそうなことをしてしまった。お前がいなくては生きていても仕方な  
 い。私もお前の所に行く。」

夫も滝に飛びこみ、命を落としました。  
 息子の死を聞いた両親も、若夫婦が身を投げた滝の所にやってきました。  
 「かわいそうなことをしてしまった。嫁のことを笑った私たちが間違っ  
 ている。お前がいなくては、生きていても仕方ない。私たちもお前の所へ行  
 く。」

長者とその妻も滝に飛びこみ、命を落としました。娘さんの両親も滝に  
 飛び込み、命を落としました。夫の親戚も、娘さんの親戚も次から次へと

Lampiran 3 Cerita rakyat Jepang

滝に飛び込み、命を落としました。

「長者さんがいなければ、生きていても仕方ない。死ぬしかない。」

長者と、長者の家族、親戚の死を聞いて、村の人々も滝の所に行き、次から次へと身を投げ、命を落としました。とうとう、村には誰もいなくなってしまいました。(2004.1.3)

